

公開講座活動報告

法人・団体名 茨城県母性衛生学会

テーマ ガンになっても・・・、ママになりたい！ パパになりたい！

講師

1. 会長講演

(座長) 重光 貞彦 龍ヶ崎済生会病院 副院長／茨城県母性衛生学会 理事

(演者) 佐藤 豊実 筑波大学医学医療系産科婦人科学 教授／茨城県母性衛生学会 会長

2. シンポジウム

(座長) 佐藤 豊実 同上

渋谷 えみ 茨城キリスト教大学看護学部 教授

(演者) ① 森 悠樹 筑波大学附属病院産科婦人科 病院助教

② 古城 公佑 筑波大学附属病院泌尿器科 病院助教

③ 井口 研子 筑波大学医学医療系乳腺内分泌外科 講師

④ 枝元 直子 筑波学園病院 認定不妊カウンセラー

⑤ 秋山 順子 茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター 副総看護師長

開催年月日 2021年11月13日(土)14時～17時

会場 つくば国際会議場多目的ホール

講演概要

1. 会長講演「女性のライフサイクルにおけるイベント時期の変化と婦人科がん

－ 妊孕性温存の話題を中心に －

女性のライフサイクルにおける様々なイベント（初経、結婚、出産など）時期の年次的変化を要因の一つとして婦人科悪性腫瘍発生の状況にも変化が現れている。その変化に伴う妊孕性温存治療の対応についてご講演いただいた。

2. シンポジウム

① 「女性がん患者の妊孕性温存」

女性のライフサイクルにおける様々なイベント（初経、結婚、出産など）時期の年次的変化を要因の一つとして婦人科悪性腫瘍発生の状況にも変化が現れている。その変化に伴

う妊孕性温存治療の対応についてご講演いただいた。

② 「男性がん患者の妊孕性温存」

がん克服後に将来子どもをもてる可能性を残しておくために、抗がん剤が開始される前に精子を採取して凍結保存しておくことを「男性の妊孕性温存」という。精子凍結保存に関わってきた泌尿器科専門医の立場から基本的な知識や実際の患者さんの悩みなどを紹介くださった。

③ 「生殖医療を受ける乳癌患者さんに対する乳腺専門医としての立場」

乳癌は日本人女性において最も罹患数の多いがんであり、生殖可能年齢に発症するがんの代表的なものである。標準治療として行われる化学療法やホルモン療法などは妊孕性の保持に大きく影響するため、根治を目指した乳癌治療と生殖の両立はときに困難となる。乳腺専門医の立場から患者自身が将来のために選択を行ううえで必要な基本的知識を解説くださった。

④ 「将来、子どもを持つことについて — カウンセラーの立場から —」

若年がん患者にとって、将来子どもを持つことが出来る可能性を得ることは、大きな希望や支えとなる。一方ですべての若年がん患者の妊孕性温存医療が叶うというわけではなく、ある時期に「産めないことを受け入れる」ことが必要になる場合がある。妊孕性温存以外の選択肢を示していくことも重要である。患者自身の選択の支援や支援体制の構築など、今後のがん・生殖医療の課題を提示くださった。

⑤ 「ママ・パパになることを一緒に考えたい — 看護師の立場から —」

がん治療をうける AYA 世代の患者への支援を目的に発足した「妊孕性温存サポートチーム」の実践報告をいただいた。そのうえで、実践の中で感じる「がん・生殖医療」の周知の重要性、相談対応ができる看護職人材育成の必要性といった課題を提示くださった。

3. 会長所感

今回のシンポジウムは、大会のテーマとした【ガンになっても・・・、ママになりたい！パパになりたい！】を達成するために、茨城県でのがん・生殖医療体制構築の進め方や考えなければいけない事柄を 5 人のシンポジストにそれぞれの立場でお話し頂き、討議となりました。ママ、パパになる道は生殖医療の活用だけではなく養子制度まで含めて患者さんに情報提供するの必要に気がつかされ、確かに私が茨城西南医療センター病院勤務時代にもその方法でママ・パパになったご家族がいたことを思い出しました。テーマを選定した私が言うのも変ではありますが、実はとても広く、深いテーマであったと気づかされました。

